

〈東川賞審査会／委員〉

(敬称略、五十音順)
 ▼安珠(写真家) ▼上野 修(写真評論家) ▼北野 謙(写真家)
 ▼倉石信乃(批評家・詩人) ▼柴崎友香(小説家) ▼丹羽晴美(学芸員 写真論) ▼原 耕一(アーティスト/レクター) ▼光田由里(美術評論家)

「受賞者紹介」

〈海外作家賞〉

グレゴリ・マイオフィス氏
 (Gregori MAIOFIS)



1970年、かつてのロシア帝国の首都であり、現在でも文化の中心地として栄えるレニングラード(現サンクト・ペテルブルク)で、芸術家の家系に生まれる。幼少期から父親にドローイング、絵画、版画を学ぶ。1987〜90年、サンクト・ペテルブルク州立アカデミー、レーピン・インスティテュートのグラフィックア

ト学部で学ぶ。1991年のソ連崩壊前に家族とともにロサンゼルスに移住。95年には故郷サンクト・ペテルブルクに戻って活動を始める。

当初は絵画、グラフィック・アート、ビデオ、写真など、多様な表現のあり方を模索するが、2000年代初頭から写真を主要なメディアとして用いる。最初の写真を用いたプロジェクト「Krylov's Fables (クリイロフの寓話)」(2000-02)や「Tant Decks (タロット・デッキ)」(2003)では、寓的なタイトルと内容によるコラージュや着色を施した作品を発表。現実を写した写真を素材に、油絵とエッチングに通じる技法を組み合わせたようなプロムオイルプリントに出会うことで、より自分の世界を具現化できる表現手段を手に入れる。

これらのシリーズを収めた作品集『Proverbs』がアメリカのナツラエリ・プレスより出版される。最新作の『Mixed Reality (複合現実)』(2018)では、現実を直視できない現代社会を生きる人間を、ユーモアを交えつつも痛烈に批判した作品を発表している。サンクト・ペテルブルクのAsian Chekhovov Novy Museumにて個展を開催し、写真集『Mixed Reality』(2020)を出版。国内外での展覧会多数。国際的にも注目を浴びている。

〈国内作家賞〉

長島有里枝(ゆりえ)氏



1973年、東京都京生まれ。

(平成5)年、武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科在学中に家族とヌードで撮影したセルフ・ポートレートで「アーバナート#2」パルコ賞を受賞。1990年代の「女の子写真」と呼ばれる潮流を先駆けた写真家として注目を浴びる。ヌードや女性性を強調するメディアの評価と、自身のアートとしての実

践との違和から渡米し、1999(同11)年、カリフォルニア芸術大学ファインアート科写真専攻修士課程修了。2001(同13)年、写真集『Pastime Paradise』(マドラ出版/2000)で第26回木村伊兵衛写真賞受賞。2011(同23)年から武蔵大学人文科学研究科博士前期課程にてフェミニズムを学び、2015(同27)年同課程修了。今年、修士論文をもとに、『僕らの「女の子写真」からわたしたちのガリーフォトへ』(大福書林)を出版。

どの多かった女性にとっての創作行為を問うシリーズ「家庭について/about home」、第二次世界大戦中に日本の女性たちが行った「千人針」をテーマとした作品を展示。「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」(横浜市民ギャラリーあざみ野/2019)では、全員の女性との対話から得たインスピレーションをもとに、写真、テキスト、記憶の問題を問いかけるような作品を発表した。家族や身近な人との関係性を手がかりに、社会や女性のあり方への違和感を掘り下げるような作品の制作を続けている。

〈新人作家賞〉

上原沙也加(さやか)氏



1993(平成5)年、千葉県市川生まれ。

2016(同28)年東京造形大学卒業。消費の対象として作り上げられた「沖繩」の記号的解釈による既存のイメージではなく、誰かの生活の延長線上にある地続きの場としての沖繩

作品の制作を続けている。

〈特別作家賞〉

高橋健太郎氏



1989(平成元)年、横浜市生まれ。20

12(同24)年青山学院大学社会学部卒業。卒業後、スイスの写真家で当時日本に滞在していたアンドレアス・サイバートに写真を教わる。

2013(同25)年、日本の若い男性の服装と思想をテーマとしたプロジェクトを始める。翌年、古くから様々な作品のモチーフとされてきた多摩川を題材に、川沿いに暮らす人々の生活をとらえた作品「河床(かじょう)」で、コンシエンシアス・ポートフォリオ・コンペティション2014選出、および第9回リマインダーズ・フォトグラフィ・ストロングホルド・グラントを受賞。受賞後、レビュアーの一人であるフランスの新聞ル・モンドのフォトエディターからの依頼を受け、原爆投下70周年の広島を撮影、同紙に掲載される。

2017(同29)年から、北海道比布町に暮らす祖父の元に通う、その日常を写した

「Tomatoes, a bird, Takeko and Koichi」プロジェクトをはじめ。同年より、戦前の北海道で起こった「生活図画教育事件」を取材するため、音更町在住の松本五郎(1920(大正9)年生まれ)、旭川市在住の菱谷良一(1921(大正10)年生まれ)の2人へ通いはじめる。生活図画教育は、1932(昭和7)〜1940(同15)年に北海道旭川を中心に行われた、身の回りの生活をよく観察し絵に描くことを通じて、その変革をめざす美術教育。旭川師範学校の美術部員だった松本と菱谷は、生活の一場面を真摯に描いた絵により、治安維持法違反の罪に問われ検挙された。

昨年、二人の日常を写した写真による展覧会「赤い帽子」(ニコソロン、銀座、大阪)を開催。今年6月、写真集『A Red Hat』(赤々舎)を出版予定。

〈飛弾野数右衛門賞〉

鬼海弘雄(きかいひろお)氏



1945(昭和20)年、山形県寒河江市(旧醍醐村)生まれ。19

63(同38)年山形県職員になる。退職後、法政大学文学部哲学科にて哲学者・福田定良の教えを受ける。トラック運転手、遠洋マグロ漁船乗組員、暗室マンなど様々な職業を経て写真家になる。

写真を通じて人間の存在の根源的なあり方を捉えようと、1973(同48)年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。1987(昭和62)年、『王たちの肖像 浅草寺境内』(矢立出版)で日本写真協会新人賞受賞、第13回伊奈信男賞受賞。その後も『や・ちまた 王たちの回廊』(みすず書房/1996)、

『PERSONA』(草思社/2003/第23回土門拳賞、日本写真協会年度賞受賞)、『Asakusa Portraits』(Steidl/2008)、『東京ポートレート』(クレゾーヤ/2011)、『世間の心』(筑摩書房/2014)、

『PERSONA最終章 2005-2018』(筑摩書房/2019)など、半世紀近くにわたる浅草の町を舞台とした市井の人たちのポートレート写真を撮り続け、出版を重ねる。

1973(昭和48)年からの浅草での撮影と並行し、人の内面や価値観などを写し取る肖像写真のように風景写真を撮れないかと、人の姿をあえて写さず、町角や路地のモノだけから人の影や匂いを描写することにフォーカスした「空間のポートレート」の試みをはじめ。夢と現実のあいだを漂い歩きつつ、人が暮らす場としての街の肖像を撮影した写真集として、『東京迷路』(小学館/1999)、『東京夢譚-labyrinthos』(草思社/2007)を出版している。

日本での撮影と並行し、1979(同54)年にはじめて訪れたインドや、トルコのアナトリアにも旅を重ね、人々の営みや眼差しのなかに、消費至上社会で失われた人間本来の感触を探るような撮影も行う。反復的に同じ場所に通い、人の営為を見つめるなかで、人間とは何かを問いかけるような写真の発表を続けている。